

フィールドワーク便り

ソーシャル・ワークとしての廃棄物対策

—ネパールのある女性協同組合の挑戦—

伊 東 さなえ *

「さあ、起きなさい、行くわよ！」

勢い良く起こされて、「はい！」と私は飛び起きた。隣に寝ている末娘を起こさないように、そっとベッドから抜け出して、まだ薄暗い家の中で階段を踏み外さないよう注意しながら、ロビナ・ディディ（ディディはネパール語でお姉さんという意味）を追いかける。時計を見ると、早朝5時前。暗いうちから、パンガ集落の一日は始まろうとしている。

パンガ (panga) 集落は、ネパールの首都、カトマンドゥからバスで1時間ほどの位置にある。近年、カトマンドゥから程近いためベットタウン化が急速に進んでいるものの、集落の中心部は昔から住んでいたネワール族によって占められており、レンガ造りの家が立ち並んでいる。もともと農家の多い集落で、ベットタウン化に伴い減少傾向にはあるものの、現在でも米の収穫時期などには、そこかしこでゴザの上に米を広げて干す光景が見られる。

さて、このパンガ集落には「パンガ・マヒラ・サハカリ（パンガ女性協同組合）」という大きな女性協同組合がある。会員数1,400

人。集落内の全てのツール（町内）に設けられた支部の代表からなる理事会により運営されている。女性協同組合という名前のとおり、会員も理事もみな女性である。業務の柱は会員からの月ごとの積立金の収集と小額融資だ。もしこの女性協同組合に入りたいと思った場合、まず、各町内の支部から推薦を受ける必要がある。そのうえで、事務所で登録を行ない、会員証と通帳の支給を受ける。それ以降は、毎月決められた額を積み立てていく。この積立金はいつでも引き出すことが可能であり、加入後6ヵ月が過ぎれば、レストランの開業、子どもの進学、夫の入院など、まとまったお金が必要なときには利子付きで融資を受けることができる。

パンガ女性協同組合の仕事はこれらだけではない。さまざまな形での啓発活動やソーシャル・ワーク（社会貢献活動）を行なっているのである。特に女性の啓蒙や内職の推進・環境改善などを重点課題として取り組んでおり、それ以外にも、災害対策から料理講習会まで、さまざまな活動を行なっている。その中でも、最近、力を入れている事業のひ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

とつが廃棄物対策である。

冒頭に出てきたロビナ・ディディはこの女性協同組合のラチンという町内の支部長である。実家の生業も、嫁ぎ先の生業も農家であった。しかし、現在では夫は建設系の事務所に勤めており、長女はオーストラリアで看護師、息子はカトマンドウのコンピューター関係の事務所勤務と、家庭全体で十分な現金収入があるため、農業は自家消費分程度である。私が青年海外協力隊としてネパールに滞在していたときにたまたま知り合った彼女は、私のことを「一番上の娘」と呼んでかわいがってくれた。研究のためにネパールに戻った際には、家に泊めていただいた。彼女はソーシャル・ワークに大変熱心な女性である。「小さいときから人の世話をするのが大好きだったし、少しでもこの村を良くしたいの。」一彼女が語る、活動の動機である。

それでは、具体的に何を行なっているのか。ロビナ・ディディたちの活動を通して、彼女たちのソーシャル・ワークの取り組みをみていこう。

朝5時、ロビナ・ディディが「一番上の娘」の私を起こしたのは、女性協同組合ラチン町内支部の有志で毎朝行なっている町内の清掃活動のためであった。ロビナ・ディディに連れられて外に出ると、真っ暗な中、すでにホウキを手に持った女性たちが掃除を始めていた（写真1）。

「この活動を始めて、もう2年になるわ。子どもたちの健康のため、と思って始めたの。」「そうそう、道具も自分たちの家にあるものを持ち寄ってね。」「始めたころと比べ



写真1 女性たちによる早朝の清掃活動

ば、すごくきれいになった。前は、1日で大きな袋にいっぱいのごみが出たけど、今は4分の1ぐらいになった。」

参加している女性たちは、口々にこう語ってくれた。

「はじめは、町内の各家から毎月10ルピーずつ集めていたのだけれど、なかなかかわかってもらえなくて、大変だったわ。それでも、はじめの1年で集まったお金で、街灯を設置したの。道具も、それで少しは買えたしね。でも、今は各家から集めるのはやめて、野菜の露店を出しに来る人たちから徴収することにしたの。あの人たちはここで野菜を売って稼いでいるわけだし、野菜の屑なんかを捨てるから、一番汚しているし、それに、きれいだとあの人たちにとってもいいはずだから。毎朝、10ルピーずつ徴収するのよ。」

そう説明すると、掃除を終えたロビナ・ディディたちは、早速露店を回り始めた。ラチン町内は中心にあるお寺を囲む形になっている。そのお寺の境内に毎朝、5～10人ぐらいの露天商が来る（写真2）。露天商といっても、近隣の農家が収穫した野菜を売りに来

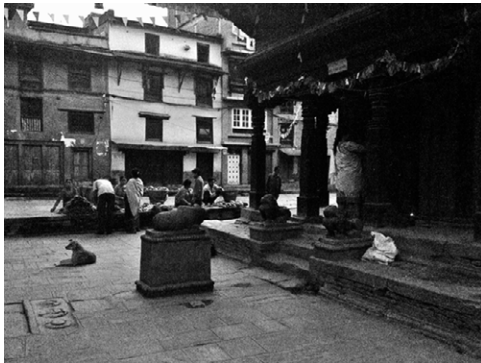


写真2 ラチン町内
手前がお寺、奥に露店が出ている。

ているのだ。すでにロビナ・ディディたちとは顔見知りなので、10 ルピーの回収はスムーズである。

さて、朝の掃除とお金の徴収が終わると、彼女たちはそれぞれの家へ戻っていく。これから、神様にお祈りをして、お寺にお参りをして、それから朝のお茶の用意をして、子どもたちを起こし、家の掃除をして、ご飯を用意して、とまだまだすることは目白押しなのである。

朝ご飯の時間は大体、9～10 時ぐらいである。ご飯を食べて、夫と息子を送り出して、やっとロビナ・ディディは一息つくことができる。しかし、あまりゆっくりはしてられない。集金に行かなければいけないのだ。

2014 年 6 月ごろから、女性協同組合は新しい事業を始めた。廃棄物処理事業だ。パンガ集落の旧市街地において、「コンポスト化できるゴミ」と「それ以外のゴミ」に分別しての回収事業を開始したのである（写真 3）。正確に言えば、事業を行なっているのは、協同組合の下部組織として新たに立ち上げた



写真3 パンガ女性協同組合による廃棄物回収

団体である。国際 NGO であるプラクティカル・アクションと行政から初期設備への支援を受け、ごみ拾い人（ウエイスト・ピッカー）を回収作業員として雇うという形で事業を行なっている。

「自分たちの出したゴミが自分たちで始末できるようになったこと、それがこの事業の成果だと思う。自分たちでできれば安心。すでに、少し街中がきれいになってきたと思う。さらに進めて、わたしたちの地域をもっときれいにしていきたい。」

女性協同組合の代表は廃棄物処理事業について誇らしげにこう語ってくれた。

さて、この事業は初期設備に関してこそ国際 NGO や行政の金銭的な援助を受けているものの、今後は金銭的な援助は見込まれない。そこで、活動継続と従業員雇用のために収益の確保が重要になってくる。現在、カトマンドゥ近郊で廃棄物回収事業を行なっている団体は、通常、回収に回るエリアの住人たちから月ごとに 100～300 ルピー程度の金額を徴収し、それを主な収益源としている。また、回収した廃棄物を分別、有価物（紙、金

属、ビンなど）を仲買人に販売するのも収益源となる。パンガ女性協同組合の廃棄物処理事業においても、各家庭から回収料の徴収を行なっているが、この徴収を担当するのが各町内の支部長なのである。登録世帯のリストを元に各家を回り、100 ルピーずつ徴収する（写真 4）。さらに、途中で新規参加希望者がいるようなら、その届出もしなければならない。そして、徴収したお金を家で計算し、事務所に納める。この一連の集金作業は骨の折れる仕事であるし、時間もかかる。報酬として月に 300 ルピーが支給されるが、「割には合わないわよ」とロビナ・ディディは笑う。「でも、これはソーシャル・ワークだから。この町をきれいにしたい。そうすれば、健康にもいいし。それに周りの人たちも、『パンガ集落はすごい』と思うでしょう？」

廃棄物処理に関していうのならば、過去にも他の市民団体が分別回収を行っていた時期があったし、行政がリサイクル可能なプラスチックのみ回収に来ていた時期もあった。彼女たちの事業が始まる前も営利企業がゴミ回収を行っていた。つまり、少なくともこ



写真 4 廃棄物回収料の集金

こ 10 年ぐらいの間、パンガ集落において廃棄物回収は常になされていたのである。ではなぜ、女性協同組合はこの事業を始めたのだろうか。「信用できないから」と代表は語る。「行政にしても、営利企業にしても、いつ来なくなるかわからないし、時間どおりに来るとも限らない。自分たちでやれるようになった今はとても安心。それに、自分たちのゴミは自分たちで処理するべきだと思う。」

彼女たちの活動には、「利益を自分の周囲の人びとに誘導している」とか、「分別回収が実質上全くなされておらず意味がない」といったさまざまな批判も存在する。また、女性協同組合の内部でも、「上層部の一部が決めた事業であり一部だけが利益を得ている」といった不満が聞かれる。

ロビナ・ディディに話を戻そう。炊事、掃除、洗濯、農作業とその合間に行なうソーシャル・ワークにより、彼女の日々の生活は非常に忙しい。ソーシャル・ワークも、ゴミ回収料の徴収だけではなく、健康に関する啓発活動や災害対策講習会への参加、町内の女性たち、特に問題を抱えている女性のところを回って相談にのること、さらにはお祭りの準備に向けた相談や資金の調達まで、多岐にわたる。あっという間に夜になって、晩ご飯の支度にかかるが、終わるやいなや女性協同組合のミーティングや町内会のミーティングなどに飛び出していくことも多い。ちょっと家事や農作業を手伝っただけで、へとへとになってしまう私の何倍もエネルギッシュな女性なのである。

彼女たちは、地域を良くすることを語り、

語ると同時に実行する行動力ももっている。一方で、たしかに、利益の得られる部分からは利益を得ており、内部でも外部でも、さまざまな批判にさらされている。しばしば諍いも起きている。しかし、それでなお、「地域

を良くすること」を模索し続ける彼女たちの姿、忙しい主婦としての生活をこなしながらも邁進していくそのパワフルでエネルギッシュな姿に、フィールドに赴くたびに私は、感銘を受けるのである。

月のあかり、みずの音

—コンゴ河の記憶—

高 村 伸 吾*

豊かさと戦争

アフリカ大陸のほぼ中央に位置するコンゴ民主共和国（以下コンゴ）がぼくの調査地だ。これまで 2013 年と 14 年の 2 回、数ヵ月間この国に滞在し、現地調査を続けている。コンゴは豊かな国だ。日本のおよそ 6 倍という広大な国土には銅・金・コバルトなどの鉱床があり、同時に世界屈指の熱帯雨林や多様な動植物相をもつ。神様がいるかいなのかは分からないけれど、何か特別な恩寵を授けた土地であるかのように思える。しかし、この国の豊かさがもたらしたのは、皮肉にも悲惨な戦争だった。1960 年代の独立に伴う政治不安、初代首相の暗殺、長期にわたる独裁政権とその崩壊。資源をめぐる諸外国の思惑に翻弄され独立後の半世紀、この国

から戦争の火種がなくなることはなかった。

1994 年、隣国ルワンダのジェノサイドを皮切りに勃発した第 1 次、第 2 次コンゴ戦争は周辺 19 カ国を巻き込むアフリカ大戦の様相を呈し、その過程で 540 万以上の人命が失われた。2002 年のプレトリア合意により名目上、戦争は終結したが、豊かな鉱床を有するコンゴ東部では未だ反政府勢力による資源略取や混乱が続く。その為、隣国ルワンダ・ウガンダとの国境沿いは日本の外務省によって退避勧告地域に指定されている。独立以前、アフリカ諸国のなかで南アフリカ共和国につぐ工業国とうたわれ、経済成長の牽引役と目されていたコンゴは、世界最貧国のひとつにまで転落した。平和合意から 10 年以上が経過した現在も地域社会再建への道筋は

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科